科目ナンバリング	G-LAS10 80020 LB34						
授業科目名 <英訳>	人新世の哲学 Philosophy in the Anthropocene			担当者所属 職名・氏名	総合生存学館 特定准教授 篠原　雅武		
群	大学院横断教育科目群	分野(分類)	人文社会科学系			使用言語	日本語及び英語
旧群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義（対面授業科目）
開講年度・開講期	2025・前期	曜時限	木3	配当学年	大学院生	対象学生	全学向

（総合生存学館の学生は，全学共通科目として履修登録できません。所属部局で履修登録してください。）

[授業の概要・目的]

温暖化、パンデミック、豪雨、海面上昇など、人間をとりまく自然環境のあり方が不安定化するなか、人間の活動のあり方、人間が生きることの条件について、考え直すことが求められている。現在、この状況を名指すものとして「Anthropocene人新世（じんしんせい）」という言葉が用いられるようになっている。「人類の地質学」という自然科学の論文が、2000年代後半に人文科学の領域で受容され、発展を遂げつつあるというのが現状である。本講義では、第一に、人新世に関連する現代の人文科学・哲学の著作、文献を参照し、そこでこのテーマがどのように扱われているかを解説ことを目的とする。そこではまず、ディペッシュ・チャクラバルティが2021年の著作『惑星時代における歴史の気候』などで展開する、「人間の条件の問い直し」という哲学的な問題を中心にして議論を展開する。人間存在の基本を揺さぶるようになった自然を前にしたときその存在条件に関わる思考のあり方を問い直し、新しいものへとバージョンアップすることが求められると考えるからである。チャクラバルティとの関連で、ティモシー・モートンのエコロジー思想を論じるが、これが重要なのは、人新世の現実を「人間が経験しているのにもかかわらず人間の通常の理解を超えている現実」と捉え、そこに関与するための思考の可能性を問うものだからである。「人新世で生きる人間とはどのようなものか」という問いをめぐる考察を深めることを目的に、「人新世」をめぐる議論が何を意味するのか、「人新世」を語ることの意義とはなにかをも問い、人新世についての哲学的・人文科学的考察についての一定の理解の仕方を提示することを目指す。

[到達目標]

「人新世」に関する哲学的・人文科学的な研究の現状を体系的に理解する。のみならず、講義中に紹介するさまざまな文献の読解を通じ、そこで何が問題になっているかを自分なりに問いつつ考えることで、「人新世」で生きるとはどのようなことか、そこで人間の存在条件を問い直すとしたらそれはどのようなものになるかを主体的に想像し、考えることができるようになる。

[授業計画と内容]

1. イントロダクション
2. なぜ人新世なのか。
3. チャクラバルティの「歴史の気候：四つのテーゼ」論文をめぐって
4. 人文科学における「人新世」の衝撃(１)人間の世界の「外部」との接触
5. 人文科学における「人新世」の衝撃 (2)人間と自然の区分の崩壊
6. 人新世における人間の変容：脆さの問題、「生存可能性（habitability）」をめぐって
7. 人新世における世界の二面性：globalとplanetary
8. 人新世における時空（地質的時間）のなかの人間
9. エコロジカルな共存：ティモシー・モートンの哲学（１）
10. ハイパー・オブジェクト：ティモシー・モートンの哲学（２）
11. Humankind：ティモシー・モートンの哲学（3）
12. 人新世における近代の問題：人為の論理とその限界
13. 人新世における表象の問題：表現の物質性をめぐって
14. 人新世と翻訳の問題：西洋の言語と非西洋の言語

人新世の哲学(2)へ続く↓↓↓

人新世の哲学(2)

15. フィードバック

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点]

レポート試験。

[教科書]

授業中、適宜文献を紹介する。

[参考書等]

（参考書）
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

授業中紹介した文献などを自分で読むことをおすすめする。

[その他（オフィスアワー等）]

[主要授業科目（学部・学科名）]